

治験のアルバイト

2014/1/22

Var. 1. 04

シナリオ…合同会社クプー

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

■登場人物

小野寺 優子（おのでら ゆうこ） 18歳 学生 女 処女

あやしげな新薬の治験バイトに参加する。

高額な報酬に釣られ、先輩の知り合いの知り合いからの紹介——という、かなり曖昧な話にもかかわらず、気軽に応募してしまった。

おっとり、のんびりといった風な性格。

あまり他人の悪意に気がつきにくく、わりと騙されやすい。

「あ、あの……はじめまして。小野寺優子（おのでらゆうこ）と言います」
「よろしく願います」

「ここって、なんだか病院の方とは雰囲気違いますね」
「受付で治験バイトのこと話したら、こっちの研究棟の方だって案内してもらったんですけど……鍵も頑丈だし、扉とかもすごく重い感じで……」

（間）

「そ、そうですね」

「実験とかしてるんですから、秘密にしないかやダメなこととか、いろいろありますよね」
『『守秘義務』って言うんですって？　そういうの』

「でも、窓もないのに明るくて、建物もすごく立派で驚きました」
「ドラマなんかで見るような……」

「ええっと、ホスピス？　とかそんな感じで、あんまり研究所っぽくなくて」

「はじめはちよつと怖くて、不安に思ってたんですけど……」

「こうしてお医者さんがすぐに診てくれるような環境だったら、安心できそうだなって……」

「あ……ですよね、もとは……ていうか、普通に病院ですもんね」

「変なこと言ってますみません」

「あの、書類の方、言われたとおりに持ってきました」

「本人確認ができる、写真つきの身分証明書と……履歴書。あと、誓約書と……」

（間）

「あの……私、今回の臨床試験？　って、サプリとかのビタミン剤的なもののモニターテストって聞いてたんですけど……違うんですか？」

「この十二条の、三……『重篤（じゅうとく）な有害事象（ゆうがいじしょう）などが認められた場合、甲の判断により、乙に対処する試験をいつでも中断できるものとする』って書いてますけど……そんな強い薬とかだったりするんでしょうか……」

「あ、そうですか」

「こういう項目、どんな薬でもサプリでも、書いてあるものなんですネ」

「すみません、初めてなのでよく知らなくて。ちよつと安心しました」

「え……？　私の身長体重……ですか？」

「事前の説明会の時に、身体検査やりましたよね？　その時のでいいですか？」

「身長は、158センチ……た、体重は……あの、52キロです」

「あの時から、変わってないです。……ちよつと、重いですよネ。すみません」

「え……スリーサイズですか？　確かに測りましたけど……」

「あ、あの……バストは78センチで、ウエストは60です」

「あとはその……ヒップは、80で……」

「すみません……これって……面接に必要な情報なんでしょうか……？」

「え？ あ、本人確認を兼ねて……そうなんですか」

「検査着を支給するのに、サイズもいるから……」

「はあ、そうだったんですか……それで……」

「あの……検査着って……」

「それって、パジャマみたいな、ゆったりとしたアレですよ？ 上からかぶるみたいな」

「今回のテストでは、参加者は終了日までこの研究棟で寝泊まりをするって聞いてますけど……ずっと、その格好になるんですか？」

「そうですか……あの格好で……」

「あの、泊る時って……普通の病棟みたいに、大きな部屋にベッドを並べるかんじで……？」

「個室なんですか。防音の？ そうですかあ……よかった……」

「着替えも出るんですか？」

「ですよ……そうですか、下着とか、肌着とかも出してもらえますか……」

「あ、それで、サイズを……詳しく……そうですか……」

「……これが、その検査着なんですか……ありがとうございます」

「明日はこれに着替えるんですね」

「ところで……これ……スリット、ずいぶん深いんですね……」

「脱いだり着たりするのは便利そうですけど……うわあ……」

(間)

「え？ ……は、はい。アレギーとかはないです」

「事前調査の時も書きましたけど、変更とか、記憶違いとかはないです」

「今までに薬とかでも問題は出てないですし……大丈夫だと思います。大丈夫です」

「はい。持病とかはないです。毎日飲んでる薬とかもないです」

「へ……？ ピ、ピル……？ 飲んでないです。使ったことないです」

「そういうのも、影響あるんですか？ そうですか……へえ……はあ……」

「『性的接触』？ って、どういうことですか……？」

「え、エッチしたことあるかどうかってこと……ですか？」

「そ、それは……ま、まだ……ですけど……」

「せ、『性交』……？ だから、それもありません。まだまだ、全然ないです！」

「妊娠……！？ し、してません！ そういうの、ないです」

「過去にもって……それはないです。ホントにホントです」

「……『だいたい』？ それって、赤ちゃんを……ってことですか？」

「ないです。妊娠をしたこととかもないですし……」

「あのお……こ、これって……今回のモニターって……」

「婦人科系のサプリとかだったんですか？」

「……そう……ですか……これも、問診の必須項目なんですか……」

「すみません、私にも知らなくて……」

「ですよええ……そう、ですよええ……」

「お医者さんなら、普通のお話なんですよえ……」

「先生たちも、職員の人たちも、お仕事ですもんね……」

「はい？ 『初経』ですか……？」

「初めて生理が来たのは……え、ええと……確か、5年生の秋だったと思います」

「お赤飯を炊かれたりするのが恥ずかしくて、お母さんにそれだけはやめてって言ったら、その夜は手巻き寿司にしてくれました」

「……って、どうでもいい話ですよえ」

「すみません、変なこと言って。私、緊張して……」

「え？ キス……ですか？ ないですよ」

「小さい時に、親とほっぺやおでこにチュウしたとか、その程度です」

「お、男の人なんて……そつ、そんなの……全然……」

「！？ かつ、間接キス！？ ないですよ？ ないです……」

「お、親となら……少しは……あったかもですけど……」

「はい……も、もう大丈夫ですか。問診とかは」

「あとは、このパンフレットを見ておけばいいんですね」

「明日の治験の開始時間までに、ちゃんと頭に入れておく……と……」

「私の部屋は……そうですか。この棟の奥の方……69号室ですね」

「はい、私物はこれだけです……」

「あ、スマホは終了日までそちらで預かりですか……」

「ですよえ……そうですよね……」

「は、はい、わかりました」

「あの……これから終了日まで、よろしくお願いします……」

「はあ……なんだか、落ちつかないなあ……」

「言われたとおりにお薬飲んで、後はなにもしなくてもいいっていうのは、気楽でいいんだけど……」

「部屋には窓もないし」

「こうやってベッドに寝転がっても、真つ白な天井しか見えないし……」

「はあ……テレビ見ても、あんまり面白くないんだよなあ」

「ロビーに置いてあった雑誌も本も、他の人にキープされちゃってるし……」

「スマホは没収されちゃったから、暇つぶしに落としてたアプリも使えないし……」

「小説でも持ってきて来ればよかったかなあ……」

「ほかの参加者の人とおしゃべりでもしてみたいけど……」

「マニュアルには『他被験者との接触を禁ず』なんて書かれちゃってるし」

「割りのいいバイトって聞いてたけど……失敗した……」

「こんなに暇だなんて思わなかったよお……」

「気持ちいなんだか落ちつかなくて、ウズウズしちゃうのになあ」

「今日は『投与された錠剤を、水またはぬるま湯で服用した後、各自自室にて終日待機』だっけ……」

「そういえば、食事も部屋で食べるんだよね」

「これから毎日……ってことは……晩ご飯まで、このまま……？」

「なにもないってことは……後はもう、寝るしかないよね……はあ……」

「……………」

（間）

「んっ、んううっ……」

「はあっ……はあ……なんか、熱い……」

「熱ってほどじゃないけど……なんか、変だよなあ……」

「空調とか、いじってないはずなんだけど……」

「はあっ……なんか、喉まで渴いてきちゃう……」

「ふううっ……お水、お水……」

（水を飲む）

「んっ、ンクッ……ごくっ……」

「セーフだね？ 大丈夫だよなあ……『水飲んじゃダメ』とか、書かれてなかったよね」

「変だな、私……頭もボーッとしてる感じだし……環境変わって、緊張してるのかなあ？」

「熱っぽいのは、ちよつと違うんだよね……」

「こんなバイト初めてだし、いろいろ不安で怖いし……ストレスとかなのかなあ……」

「はふ、はふううつ……身体が、なんか……ザワザワする……」

「ちよっと汗っばいし、着替えちやおうかな……」

「着替えもいっぱいもらってるし、今着替えちやってもいいよね……」

「よいしょ……つと……こっちのキャビネットに、着替えが全部入ってるはず……」

（間　着替えを始める優子）

「んっ……あ、はんっ……あ、あれ……なんか、変……やっぱり、へんだ……」

「生地がこすれて……はう、んあ……ゾクツてしちゃう……はうううつ……」

「や、やだ……アソコまでヌルヌルになっちゃってる……んっ、んううつ……」

（成り行きに任せてオナニー開始）

「はあ、はあっ……どうして……？　トロトロしたのが出て来て、とまんない……」

「……んっ、んう……パンツが、グショグショになってるよおっ……」

「はあ、はあっ……恥ずかしい……アソコが、こんなに濡れちゃってる」

「どうしよう……パンツ履き替えても、これじゃすぐダメにしちゃうよ……」

「んあっ、ふああっ！　ダメ……タオルがこすれただけで……変に、感じちゃうっ……」

「うあ、ああっ」

「はあっ、はあっ……タオルやティッシュでふいても……」

「ふあ、ああんっ……また、出て来ちゃう……」

「でも、どうにかしなきゃ……はふ、はふうつ……」

「ふう、はふうつ……どうしよう……はあ、はあ……」

「おまけに、すごく熱いの……ふあ、割れ目も、中も……んううつ！」

「どうしよう、着替えるだけのつもりだったのに……」

「なんか、だんだんエッチな気分……」

「だ、誰も……来ない……よね？　この部屋、防音って聞けるし……」

「プライベートは守られてるって言うし……す、少しだけなら……」

「……オナニーしちゃっても……バレない……かな……」

「あうっ……あ、ふああっ……て、いうか……コレ、どうにかして落ちつかせない……」

「恥ずかしいけど……はあ、はあっ……も、もうちよっと、指で触って……」

「んあ、ああんっ……」

（クチュクチュ　等の汁の音）

「やだ、やつ、やだあっ……指が、チュブツつて……」

「少し入れただけなのに、音立ってる……ふう、はふうつ」

「す……すごい……いつもより熱くて……」

「んああっ、ヒダヒダが膨れちゃって……汁で、ヌメヌメだよお……」

「どうしよう……ああ、んあっ！　上のクリトリスまで、ふあ……」

「んはあっ……ヒクヒク、しちゃうっ……」

「んくっ!! はう……ちよつと、割れ目のところからなぞっただけなのに……」

「あ、ああんっ……すぐく、感じちゃう……」

「……はあつ、はあ……はう……この中、どんなふうになってるんだろう……」

「ヌルヌルで、熱いのはわかるけど……ふあ、んあつ……はふうっ……」

「んっ……中まで、指入れちゃうのは……さすがに、ちよつと、怖いよ……んああつ」

「はうっ、はふう……ん、んううっ……」

「入り口、ほんのちよつと、触るだけ……ちよつと、ちよつと……だけ……」

「っ、んくっ! 穴が……ふあ、指に吸い付いてくる……はう、ああんっ……」

「す、すごい……指、ちよつと動かしただけなのに……」

「はあ、はあ……クチュクチュ音がしてる……」

「だめえっ……中から、エッチな汁が……」

「あんっ、あ、あふれてきちゃう……はううっ! こぼれちゃう……」

「指先も、手も……汁でトロトロ……はあつ、はあつ……」

「ふう、はふうっ……うう……クリトリスも……前より、かたくなってるみたい……」

「はううっ! はうっ……」

「う、上から……軽く抑えるだけで……ビリっつて、きちゃうっ……んああつ!!」

「はあ……はあ……私っ……はっ……あ、アソコ……思いつきり、触っちゃってる……」

「こんなこと、だ、ダメなのに……ああつ、私、オナニーしちゃってる……」

「病室で、オナニーしてる……はあつ、はふ……んはああつ」

「でも、手がとまらない……」

「始めちゃったら……あふ、ふああつ……もう、我慢なんてできないよおっ……」

「んああつ! やだ……ふう、ふうっ……」

「クリトリス……こんなに、膨れてる……あ、あんっ」

「……これ、軽くつまんじやったら……あ、ああ……すごいことになっちゃうかも……」

「うくっ……う、うああつ……」

「入り口クチュクチュしちゃうだけでも、軽くイツちやいそうなのに……」

「はああつ、はうっ! はああ……んううっ……もつと、刺激がほしいよおっ……」

「もつと触って……ヒダヒダもつまんで……はあ、はあつ……んうっ……いじめたい……」

「ツ!! はううっ……やだ……ヒダも膨れて、すぐく、ぶ厚い……はあ、はあつ……」

「汁でヌルヌルしちゃって……」

「あ、ああ、うまくつまめないよ……んくっ、んうっ……あ、あんっ……」

「あ、やだ……んうっ、くうっ! 変につまんだら……あふ、爪、立っちゃう……」

「はあ、はあ……指先じゃなくて、指の腹でつまんでみないと……はんっ……」

「優しくつまんで……あふ、ちよつとだけ、引っ張って……」

「ああつ、あんっ……クリトリスも、引っ張られちゃう」

「ふあっ……ああ、はあっ……はあクリトリスも、一緒に……」

「んくっ！ き、気持ちいいっ……」

「……んうっ、はう……私、こんなにエッチな子だったかな……」

「はあ、はあっ……こんなに、エッチなことしたくなっちゃうなんて……」

「こんなところ触って、つまんで……自分から……積極的に動いちゃってる……」

「オナニーなんて……ほとんどしたことないのに……それなのに……」

「っ……でも……ふあっ、ああ……もつと、したいの……」

「……ヒクヒクしてる、クリトリス……」

「もつと触りたい、もつと、指で摘まんでみたい……」

「んうっ！ んっ、んふうっ……ふあ、先っぽ剥けて……あんっ！ すごい、敏感っ……」

「あふ、はううっ！ 指で押しただけでも……」

「んあ、ああ……ビリビリ、する……ンクッ！」

「ああ、あんっ……余計に、アソコが……ああっ！ う、疼いちゃうっ……」

「ダメなのに……ああ、ヒダヒダなんかより……あふ、はううっ！ 気持ち、いいっ……」

「もつと、もつとお……あ、ああんっ！！」

「もつとつまんで……あは、はあっ……こすって、軽く潰して……」

「はうっ、んくうううっ！！」

「あ、ああ……前よりも……汁が、濃くなってる……はあっ、はああっ……」

「んうっ、はう……白くてネバネバしたのが……指にも、手にもまとわりついて……」

「ああんっ」

「だ……ダメ、だめえ……もつと、したいのおっ……」

「一緒にヒダヒダも、かき回しちやいたい……はううっ」

「はあ……はあっ……ああんっ！！」

「ダメ、抑えなきゃ……でも、ダメ……もつとしたくなっちゃうっ……」

「こ、声、でちゃうっ……」

「や、やあっ……ああんっ、腰まで、一緒に動いちゃう……はう、んううっ！」

「ふう、はふうっ……あ、あんっ、だめ……全然、足りないっ……」

「片手じゃダメ……もつと両手で……」

「もつと、もつとおっ……早く、思いっきりオマンコに擦りつけて……」

「はあ、はああっ！ つまんで、いっぱい、いじめて……」

「くううっ、んくううっ！ もつと、もつと……」

「クリの先っぽ押し潰して……あっ、あああっ！！」

「はあ、はあっ……はうっ……もうダメ……イキそう……私、もう、イッちゃう……」

「クリトリス、ビリビリしちゃうっ……火照って……ああ、穴まで、ううっ、疼くのっ……」

「もつと、たくさん……強く、思いっきり……」

「んあつ、あはんっ！ 激しくこすって、んあ、あああつ……」

「はううっ！ ダ、ダメ……い、イッチャう……ふあつ、あああつ！」

「あああああああああああああああつ！！」

（間）

「……………」

「はあ……はあ、はあ……」

「あ、ああ……しちやった……」

「イッチやった……」

「……………最低だ……私……」

「いくら個室だからって……ここ、病院なのに……自分の家じゃないのに……」

「今……私、バイト中なのに……オナニーするとか……」

「これじゃあ……エッチ大好きな変態さんみたいだよ……やだ……そんなんじゃないのに……」

「変だよ、おかしいよ……こんなの……」

「……………」

「……バレない……よね……大丈夫だよね……？」

「声、聞こえちゃってたりしないよね……」

「ここ、防音だつて聞いているし……大丈夫だよね」

「……………もう……忘れよう……忘れちゃおう……」

「晩ご飯まで、まだまだ時間あるよね……」

「パンツも検査着も、全部新しいのに着替え直して……時間まで寝ちゃおう……」

「……お、おはようございます。今日もよろしく願います……」

「え……？ 元気ないですか？ そうですか……？ そんなこと、ないですよ」

「大丈夫です。朝ご飯の前に測った時も、特に異状とかなかったですし」

「血圧とかも、体温もいつも通りで……」

「へ？ 私……か、顔……赤いですか？ そう、ですか……？」

（間）

「……え？ 『副作用の症例』？ 『データ収集』……って」

「このお薬、副作用あるんですか？」

「は、はい。マニュアルはちゃんと見ましたけど……」

「副作用については何も書かれていなかったような……」

「そこは、開示してない……ですか。そうなんですか……」

「被験者の思い込みを防ぐため……ああ、ですよ……そういうこともありますよね……」

「？ このプリントは、なんですか？ 初めの時にもらったのとは、違いますよね」

「え？ レポート？ 他のテストの人のですか？ 副作用の、報告……そうですか」

「私にも副作用ぽいことが起きた時は、こんな感じで報告をまとめればいいんですね……」

「はい、わかりました」

「ありがとうございます。これ、後で部屋で読みますね」

「え？ 今ですか？ 今これを……読む……」

「あ、持ち出しはダメなんですね。すみません」

（間）

「……………」

「え？ 今、これ……報告書を見てますけど……？」

「え？ 『音読』？ 声に出して読むんですか？」

「……は、はい、先生。わかりました」

「……………」

（以下、他人のレポートの朗読 ※「わたし」は別の治験参加者のことで、ヒロインではありません）

「——試薬の服用量も、時間も変更はなし」

「わたしは試薬を飲んでから、指示通りに自分の部屋で安静にしていた」

「しばらくの間、特に異常は感じなかった」

「だけど、時間が経つてくると、少しずつ、身体が火照（ほて）るような感覚になった」

「喉も渴いてきて、息も荒くなってきたけど、身体にだるさがあるとか、頭が痛いだとか、風邪っぽい症状ではない」

「これが薬のせいなのか、単純に体調が悪いだけなのか、すぐには判断がつかないので、わたしはしばらくベッドで寝ていた」

「それから30分も経たないうちに、全身がゾクゾクしてきた」

「ただし、それは寒気とかじゃないように思えた」

「疼(うず)きというか、興奮しているような、落ちつかない感じだった」

「でも、ここでは特にするかもしれないし、体調が悪い可能性も捨てきれなかったので、少し様子を見ることにした」

「様子を見るといっても、本当に見守るくらいしかない」

「検温の時に回収されてしまうから、体温計すら測れない」

「わたしはベッドの中でゴロゴロしたり、身体を揺すってみたりするくらいしかできなかった」

「身体を動かしているうちに、検査着や布団やシーツが妙に身体にまとわりついてくるような気がした」

「皮膚が敏感になっているのか、時間が経つにつれて、強い刺激を感じるようになってきた」
「布地が肌に触れたり、軽く身体をかすめたりするだけでも、なぜか気持ちいいと感じてしまう」

「少しずつ変な気分になってきて、わたしは両脚を強めに閉じて腿をこすりつけたり、脚を絡ませたりして、自然と股のあたりに刺激を与えていた」

「でも、この程度では全然物足りない」

「何度腰をくねらせても、自分で締め付けてみても、本当にほしいところには刺激は与えられない」

「我慢しきれなくなつて、わたしは股間に手を伸ばした」

「……………」

(文章を見て、先を読むのを少し躊躇する)

「……あ、あのお……こ、これ……書かれてるとおりに読まなきゃ、ダメですか……」

「ダメですか……ですよ……はい、わかりました……」

「……………」

(再び朗読に戻る)

「——下着はとくに脱ぎ捨てていたので、邪魔になるものはなかった」

「わたしが手を伸ばすと、指先はすぐに土手から割れ目に向かって滑り込んでいった」

「愛液が潤滑剤になったせいもあるんだと思う」

「濡れた割れ目はもちろん、その内側も、も……」

(文章を見て、先を読むのを少し躊躇する)

「……………」

「もう、あ……」

「愛液まみれになっていた」

「……」

「……………」

（躊躇したまま無言でいると、続きの文の漢字の読み方を教えられる）

「え？ ……『だいいんしん』？」

「あ、はい……ですよね、そう読むんですよね……この漢字」

「……はい……大丈夫です。読めそうです」

「というか、読まないダメ……なんですよ……」

「……………」

（再び朗読に戻る）

「——大陰唇（だいいんしん）の内側には、粘りのある汁がたっぷり溜まっていて、指を伝って、中からトロトロと漏れてきた」

「もちろん」

「もちろん……」

「……」

「小陰唇も汁にまみれていて、汁の匂いというのか、いやらしい発情した熱気のような匂いが漂っている」

「……………」

「わたしは、指一本だけじゃ物足りなくて、すぐに指を二本、三本と増やしていった」

「膣の中に指を三本、付け根のあたりまで入れてかき回してみても、それほど満足できなかった」

「動きを速くしてみても、強めに突いてみても、実際のセックスの時の刺激には、ほど遠い」

「膣を中から摩擦するのは変わらなくても、指と陰茎では、その感触は全然違う」

「あんなに太くて、熱いものとは比べものにもならない」

「中で指を曲げてみても、その瞬間は心地よくても圧迫感は長続きしない」

「ここには相手になる男もないし、使えそうな道具も置いていない」

「もつと感じていたのに、強い刺激は得られそうもなくて、かえって焦れなくなった」

「勃起した乳首をつまみながら、私は荒々しく指を抜き差させていた」

「……………」

(文章を見て、その先を読むのを躊躇する)

「あの……先生……？　これ、本当に全部読まないとダメなんでしょうか……」

「え……終わりまで、全部……？」

「そうですか……ですよ、持ち出し禁止ですもんね……ここで読まない……」

「『自分に似たような症状が現れたことがなかったか、思い出すため』……って……」

「……………『似たような』『症状』……」

(間)

「は、はい！　聞いてます、大丈夫です」

「すみません……レポートが思っていたのとちよつと違って、混乱してるっていうか……」

「はい……続き、読みます……書かれてるとおりに、ですよ……はい、わかっています……」

「……………」

(再び朗読に戻る)

「——汗が多量にあふれてきて、指はもちろん、手のひらにも手首にも」

「……………」

「わたしの愛液が伝ってきていた」

「シートもグショグショに濡れて、水溜まりみたくなってきていたと思う」

「指を動かすたびに」

「……………」

(内容の恥ずかしさと、思い当たる節が幾つかあることに気付き、朗読のスピードが落ちる)

「……………」

「愛液が漏れてくる音と、粘膜ごと指にかき回されている音がする」

「部屋の外には聞こえていないはずだけど、それはわかっていても、やっぱり恥ずかしかった」

「膨れたヒダが収縮して、指に絡みつくように迫りあがる」

「わたしは夢中になって腰を浮かせて」

「指を奥に奥にと押し込んでいたから、時々、それにあわせてヒダもめくれあがったりしていた」

「どんなに気持ちよくても、満足しきれなくて」

「わたしはもっと激しい刺激が欲しくなっていた」

「何度か」

「力任せに陰核を摘まんでみたけど」

「快感を得られるのはその刺激の瞬間だけで、イキそうでイケないの繰り返しだった」

「……………」

「とにかく」

「陰茎の代わりになるものを、たまらなく疼いているこの中に、入れるものがほしかった」

「……」

「ミネラルウォーターのペットボトルなんて、太すぎて入るわけないし」

「食事用の箸なんて、ねじ込んでも気持ちよくなれない」

（声が小さくなってくる）

「わたしは、部屋に持ち込んでいた筆記用具の中に、マジックがあつたのを思い出した」

「ペンケースには、細字や中字のペンタイプじゃなく、軸の太い、黒のフルトペンが入っているのを思い出したのだ」

「私はすぐに、引きだしからペンケースを取り出して、一番太いものを握りしめた」

「粘液まみれの穴にねじ込むのに、潤滑剤なんて必要なかった」

「……」

（動揺して、イントネーションがおかしくなる）

「こ、近藤……む」

「……」

「コンドームは持っていなかったから」

「そのまま入れなきゃならないことにっ少しだけ抵抗はあつたけど、」

「抵抗はあつたけど、」

「……………」

（間）

（文章を見て、先を読むのを躊躇する　そして注意される）

「いいえ、そうじゃなく……漢字は、読めます。読めてます」

「す、すみません……！　ふざけてないです……」

「……………ただ……ううっ……やっぱり、刺激が強すぎるっていうか……」

「真面目にやってます……さ、最後まで……読みますから……は、はい……」

（再び朗読に戻る）

「——っ少しだけ抵抗はあつたけど、これから得られる刺激のことを思うと、そんなことどうでもいいように思えた」

「キャップを被った、ペン先側の、先の細い方を穴に押し当ててみると、少し冷たくて、ひやつとした」

「そのまま入れるつもりだったけど、キャップのゴツゴツした滑り止めの凹凸の部分が気になつて、穴から逸らして陰核に押し当ててみた」

（やっぱり時々言い淀む）

「……………」

「指で触った時よりも硬くて、強めに突くと、摩擦よりも圧迫感を感じた」

「何度か上下にこすって押し当てていると」

「陰核の皮がめくれて、赤く膨れた中身が顔を出した」
「ほ、ほう……ひ……」

「包皮の取れた陰核はさらに過敏になっていて」

「キャップを押し当てただけで軽く絶頂してしまう」

「ただどしく読みあげながら、徐々に興奮してくる」

「キャップの凹凸が、陰核をかすめ」

「軽く引っ搔くような刺激を与えてくれたせいかも知れない」

「軽い絶頂を味わうと、穴から飛沫が迸って」

「穴もヒダも激しくうごめき、ヒクついた」

「このまま陰核を責め続けたい」

「とも思っただけど、やっぱり、膣の中に入れたい」

「わたしはすぐにマジックの太い持ち手を穴の中へとねじ込んだ」

「……………」

（間）

（生唾を飲み込むような息継ぎをする）

（再び朗読に戻る）

「——グジュグジュ、ヌブヌブと」

「品のない音を立てて、穴はあつという間にマジックの軸をしゃぶるようにして飲み込んでいく」

「わたしが手で握り続けていたせいか」

「穴の縁に触れても、キャップでこすった時のような冷たさは感じなかった」

「やつとそれらしいものを入れられたことがうれしくて」

「わたしはすぐに軸を穴の奥まで根元まで差し入れた」

「今、太くてかたいものが、私の穴に入っている」

「大腿開きで膣にマジックペンをねじ込んでいるなんて、この姿を誰かに見られたら、どう思われるだろう」

「でも、そう思っている、これを引き抜くことなんて考えられなかった」

「……………」

「自分から穴を締め付け、腰を振って、穴に収めたマジックの感触をもっと味わっていたかった」

「その時のわたしは、恥ずかしさを覚えるよりも、欲望と興奮に支配されていたと思う」

「ベッドの上に四つん這いになって、根元近くまで埋もれさせてマジックの軸を引き抜き、すぐに思いきり入れ直す」

「……わ、わたしが……………」

「わたしがいいつも、パパにされている時のように」

「セックスの時の腰の動きを思い出しながら、夢中になって抜き差しを繰り返した」

「太くて硬い軸のおかげで、わたしは指以上の快感を得ることができた」
「だけど」

「軸の太いマジックは、ペンタイプのものに比べると、長さが長さが短い」

「愛液まみれになってくると、ヌルヌルしてつまむことも難しくなる」

「キャンプの部分が穴から飛び出しているも、掴める部分もほとんどなくて、穴から引つ張り出す時には、少し苦勞した」

「それでも」

「そうやって、もたついてしまいところが意外な焦らしになってくれて、もっと興奮できた」

「抜き差しをするだけじゃなく、穴に埋もれたままの状態でグリグリと軸を押し当てたり、膣をえぐるように動かしてみたりした」

「動かしていると、どんどん気持ちが悪くなって、喘ぎ声も漏れてきた」

「唇は、だらしなく緩んだままで、声が漏れるのと一緒に、涎まで垂れてくる」

「愛液まみれの膣と似たような状態で」

「舌まで出して、夢中になってマジックを動かして、わたしはずっと喘ぎ続けた」

「ずっとこのままでいたい気持ちと、あと少しでイケそうだ、イッてしまいたいという気持ち」
「心が心の中で戦っていた」

「……………」

「でも」

「やっぱり思いきり快感を楽しみたい気持ちには逆らえなかった」

「すぐにでもイッてしまいたくて、わたしは、なりふり構わず身体を動かしていた」

「オナニーに夢中になっているうちに、膣が熱くなってきて、愛液の量も増えてくる」

「膣はもちろん、快感は全身にも広がってきて、考える余裕はなくなっていた」

「……………」

（間）

（息継ぎをするが、切なげな溜め息混じりの息継ぎになる）

（再び朗読に戻る）

「——あと少しで」

「あと少しでイケそう、イケそうという感覚に従って、後はそれに向かって動くだけだった」
「激しい絶頂を迎えるまでに、それほど時間はかからなかったと思う」

「もう来る、そう思った時には、もう意識は飛びかけていた」

「頭が真っ白になって、わたしは声にならない声をあげていた」

「叫び声みたくなっていたような気もするけど、あまりよく覚えていない」

「すごいスピードでなにかが全身を駆け抜けて、頭の先に突き抜けていくような感じだった」

「気持ちよくて、私はそのまま気を失っていた」

「しばらくして気がつくと、もう夕食の時間になっていた」

「身体の火照りを感じてから、気を失うまで、1，2時間くらいの出来事だったと思う」

「普段の生活でも、オナニーがしたくなることはたまにあるけど、こんなふうに出かけた先でしたくなるようなことは、今まではなかった」

「もしも、わたしがセックス未経験だったら、こんな気分になったりしなかったのかも知れない」

「あの時の身体の状態が副作用だと言えるのかどうかはわからないけど、『目に見える身体の変化』として、念のため記録しておく」

「……………」

（他人のレポートの朗読　ここまで）

「……………」

「あ…………あの…………先生…………読み終わりました…………」

「レポートって…………こ、こんなふうに…………書くんですか？」

「私、自信ないです…………こんなに詳しく書いたりは、できないです…………」

「…………『書ける範囲で』『具体的に』『詳しく』…………は、はあ…………そうですか…………」

「先生…………あの、念のために確認なんですけど…………」

「試験に関してのレポートって、身体の異常だとか、そういうの…………なんですよ…………」

（間）

「これを読んでみて…………あんまりこの人が正常とは…………」

「思わないですよ…………異常…………ですよ…………」

「は、はい…………ですよ…………そうですね…………」

「ええ…………はい…………確かに…………」

「こんな感じに書けるかどうか、ちょっと…………わからないですけど…………頑張ってみます」

「あの…………それで、この後は…………」

「いつもの通りに部屋で待機…………ですよ…………」

「…………は、はい…………大丈夫です。それでは、失礼します…………」

「……………」

「はぁ……すごかったなぁ……あのレポート……あそこまで書けちゃうんだ……」

「読んで、ずっとドキドキしっぱなしだったよ……」

「あれをその場で読めなんて言われても……」

「どうリアクションしていいかわかんないよね……それも、声に出して読めなんて……」

「モニターテストなんだから、データが必要なのはわかるし……」

「わかってるけど……でも……」

「いくら試験のためでも……私、あそこまで書けないよ……」

「……でも、あのレポートの内容から考えると……」

「お菓を飲んで、私に変な気分になったのって……」

「やっぱり、副作用の可能性があったってこと……なのかな？」

「……………」

「だったら、今度はわかる範囲で記録を取るとかしないと……」

「気をつけておかないとダメだよね……」

「……あそこまで細かく書くのは、絶対に無理だけど……」

「……………」

「今日の分のお菓飲んでから、30分経過か……」

「前は、このあたりでドキドキしたり、喉渴いたりしてたよね……」

「ううっ……」

「神様……！　どうか、今日は何も起こりませんように……！」

（間　発情状態になる）

「はぁ、はぁ……」

「やっぱり……身体……火照ってるみたい……」

「喉も渴いてるし……ふうっ、ふう……アソコが、ジリジリしちゃってる……」

「うわぁ……下着も、前と同じ、ヌルヌル……んっ、んううっ……」

「お菓飲んでから……んっ、んううっ……」

「まだ、一時間は経ってない……よね……はぁ、はぁあっ……」

（様子見しつつ　オナニー開始）

「ううっ、んう……量とかは、わかんないけど……たくさん出てるよね……」

「エッチな汁……あ、愛液？　はう……はううっ……」

「んっ、んう……手に取ると、ドロツとしてる、ような……」

「ああ、またパンツグショグショだよおっ……はぁ、はぁっ……」

「まだほとんど触ってないのに……この前より、いっぱい出ちゃってる……」

「んうっ……ああんっ……もう、パンツ脱いじやっていいよね……」

「これじや穿いてる方が気持ち悪いよ……」

「っ、ううっ……！ やあっ……やっぱり感じちゃう……」

「これ、ちよつとの刺激でも、敏感になっちゃってるのかもっ……あんっ」

「ふう、はふうっ……アソコの様子は……どうなってるんだろう……」

（クチュクチュ 等の汁の音）

「んううっ！ はうっ！ はあ、はあっ……割れ目も、内側もトロトロになってる……」

「ふあ、ああっ……は、はううっ……指、入れなくても……すごい……」

「汁が、すごいあふれて……ああ、もうシートまで垂れて……」

「はあっ、はあっ……はうっ、濡れちゃってる……」

「はうっ、う……ああんっ、濡れてるなんて、そんなもんじゃ、ないかも……」

「ああ、あううっ……」

「穴のあたりから、エッチな音がしてるよお……はあ、はああっ……」

「どうなってるのかな、これ……」

「あ、あううっ……穴が、ああ、ヒクヒクしてるっ……」

「はあ、はあ、もうフリフリのところが熱くなって、膨れてる……」

「これが……はふ、『小陰唇』……？」

「そうか……ヒダヒダも動いてるから、一緒に音が出てるんだ……」

「んっ、んううっ！ はあ、はあ……」

「もうちよつと、アソコの状態がどんな感じか……確かめておかないと……」

「穴とか、ヒダとか……クリトリスとか……」

「はあ、はあっ……全部、熱持ってて……プックリ膨れてるみたい……」

「指で、ちよつと摘まんでみたら……どうなるかな……」

「ああんっ！！ ふあ、んはあっ！ この刺激……」

「はうっ！ クリトリスの皮、めくれた……？」

「はあ、はああっ……間違い、ないかも……」

「指に、硬くてヒクヒクしたのが当たってる……ふあっ、ああっ……」

「！！ んくっ……ちよつと圧しただけでも、ひやああっ！ 感じちゃうっ……ああっ！」

「はふっ、はううっ……んううっ！ だめ……刺激に感じちゃってる場合じゃないよ……」

「どんな感じか、少しは覚えておかないと……ああ……」

「ん……ううっ……」

「大きさとかは、見た目だとか、感触でしか、わからないけど……はあっ、はあっ……」

「はううっ！！ や、やあっ……ちよつと、強くつまみすぎたかも……ああんっ、はふ……」

「あん、ふああっ……クリトリスの、剥けたところ……」

「はううっ、指先より、小さい……よね……？ あ、ああんっ……」

「人差し指の、爪と……同じくらいかも……」

「んんっ、それより、ちよっと小さい……かな……？」

「んっ、んうっ……やっぱり、ここが……クリトリスが、一番感じるみたい……」
「うっ、うくっ」

「はふうっ……触るたびに、あんっ……汁が漏れてきちやう……」

「ああ、あうっ、穴がすぐく、ヒクヒク動いてる……ふああっ」

「穴に指先近づけたら……あ、あううっ、やあっ……穴が……あん、吸い付いてきちやう」
「クチュクチュって、吸い付いて……はあ、はあっ、キスされてるみたい……」

「こ、これって……」

「身体が、もつとエッチなことしたくなってるって……こと、だよな……？」

「ああっ、ふああっ……指先、中に入っちゃいそう……」

「アソコが、中に欲しがってる……はあ、はああっ……」

「でも、指丸ごとは、絶対無理……んくっ、ううっ！」

「……レポートの人は……ペンとか入れたんだっけ……」

「はあ、はあっ……ペンは無理……ていうか、入れられないから」

「だって……私、エッチなんてしたことないし……指だって無理だよ……絶対、痛いよ……」
(試しに胸も愛撫してみる)

「んあ、ああっ……そうだ……レポートの人、おっぱい触ってた……」

「……はふ、はううっ……」

「私のおっぱいも、布地がこすれて……感じちゃってる……ああんっ……」

「はあっ、はあっ……おっぱいも、ちよっと触ってみよう……ん、んううっ」

「や、やあっ、乳首が、あふ……硬くなってる……クリトリスと、同じくらい……」

「ふあっ、ああっ！」

「はうっ！ 乳首つまんだだけで、あふ……ビリってしちやう……ああんっ！」

「や、やあっ……アソコから汁も、ピュピュって……恥ずかしいっ……んうううっ！」

「う……んくっ……はああっ……ちよっと、揉んでみたら……どうなるのかな……」

「軽く揉んだだけでも、ああっ……はう、んううっ……頭、ボーツとしてきちやうっ……」

「んっ、んうっ……乳首も膨れて、硬くなって……」

「んううっ、つまみ直すと、コリコリしてる……ふあ、恥ずかしい……」

「はううっ！ はう……んあ、んはああっ、おっぱいに……」

「うくっ、はうっ！ クリトリス、ついてるみたいっ……」

「はふうっ……んっ、んうっ……おっぱい、すごく気持ちいい……はあ、はああっ……」

「ッ……！ ふああっ！ アソコも、前よりグチュグチュで……」

「はふ、んくうっ！ ああ、おっぱいいいじるたびに、ゾクゾクするっ……」

「ダメ……もう、イッチやうかも……ふあっ、あああっ……！」

「だめ、だめえっ……きちやう……もうイツちやうっ……」

「あっ、あああっ！ ふああっ！！」

（絶頂）

「くっっ、イツ……いくううううううううううううううう！！」

「あああああああああああああああっ！！」

（間）

「……………」

「……ふうっ、ふううっ……はあっ、はあ……」

「また……イツちやったあ……おっぱいでも、イツちやった……」

「もしかしたら……この前よりも……感じてた、かも……」

「はあ……はあっ……これを、レポートにしなきゃダメなのかな……」

「エッチな気分になって、オナニーしちゃったこと……書かなきゃ……ダメ……？」

「んうっ……クリトリスの大きさとか……乳首の、感触とか……」

「……………」

「どうしよう……自信ないよお……」

「……副作用だったとしても……最低だよね……オナニーに夢中になるなんて……」

「でも…………すごく……気持ちよかった……」

※非公開	※非公開	※非公開	※非公開
	エピソード		後日の朝・問診前

（全身を拘束し猿ぐつわをされている。電極が乳首と局部につながっている）
「ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！」

（断続的に送電開始。電気が流れるたびに猿ぐつわをされたまま叫ぶ）

（効果音は「びっ！」という短い電気刺激音を声に合わせて断続的に）

「んぐっ！」

「んぐっ！ んっ！ んっ！ んっ！ んっ！」

「んぐっ！ んぎっ！ んっ！ んっ！ んっ！」

「んっ！ んっ！ んぐっ！ んっ！ んっ！」

「んぐんんんんっ！」

「んぐんんんんんんんんんんんんんんっ！！！」（絶叫）

（送電停止）（効果音終了）

「ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！」

（強い電流送電開始）（効果音は、びびびびびっ！という大きめな音）

「んんんんんんんんんん！！！」

「んんっ！ んんんんんっ！」（送電停止）

「んーーーーっ！！！！ んーーーーっ！！！！」（呼吸が荒い）

（強い電流送電開始）（効果音は、びびびびびっ！という大きめな音）

「んぐんんんんんんんん！！！」

「んんっ！ んんんんんっ！」

「んぐんんんんんんんん！！！」

「んっ！ んっ！ んっ！ んんんんんんんんんんんんんんんっ！」（送電停止）

「んーーーーっ！ んーーーーっ！」（呼吸が荒い）

「んーーーーっ！ んーーーーっ！」

「ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！」

「ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！ ふーーーーっ！」

（強力な電流が一気に直撃）（びびびびっ！）

「んぐうっ！！！」（大声を出してのけぞる）

「ん……ん……ん……ん……ん……ん……」（気を失い、弱々しく鳴咽）

「んん……んん……んん……ん……ん……ん……」

（弱い電気を一回流して強制的に目を覚まさせる）（びびびっ）

「んぎっ！ んぐっ！ んぐっ！」

「んーーーーっ！ んーーーーっ！ ふう！ ふう！ ふう！」

9. サークル挨拶音声（購入者用）キャラづくりする必要なく、事務的に読んで下さい

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して」

「椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラックスした状態でお聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり」

「物にぶつかるなどして怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず」

「スピーカーから大音量で本作品を再生した場合、あなたの人生に深刻な

問題を発生させる恐れがありますのでくれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

10. 体験版ダウンロードの案内音声

「体験版をダウンロードいただきありがとうございます」

「あ、わたしですか？ わたしは小野寺優子といいます」

「一人暮らししてるんですけど……」

「家賃とか食費とか光熱費とか、あとほら、スマホ代とか高いじゃないですか」

「親からの仕送りもそんなに無いですし……」

「ファミレスでアルバイトしてるけど、それだけじゃ全然足りなくて……」

「かといって、風俗とかそういうのは嫌ですし……」

「そんなことを大学の先輩と話したら、先輩の知り合いの知り合いが、なんか、すごくいいバイトを知ってるって聞いたんですよ」

「治験……っていうバイトみたいなんですけど」

「なんか、開発中のお薬をテストするアルバイト。お薬の人体実験？ なのかな？」

「開発中といっても、動物実験とかでずつとテストを繰り返して、ほとんど安全だと確認できた状態で、商品として販売する前に、最後に人間でテストをするから、ほとんど問題はないんだって」

「あと、その人も、なんかビタミン剤みたいな物だって言ってたし……」

「なんか、お薬飲んで、あとはずっと病院で過ごすだけでたくさんもらえるみたいなの」

「こんなに楽で、たくさんもらえるバイトって、そうそうないよね！」（嬉しそうに）

「この作品は、わたしがその治験のアルバイトをするお話しなんだって」

「体験版を聴いて、気に入ったら『治験のアルバイト』の製品版を買ってね！」